創世ホール通信No.317

催し案内＋文化ジャーナル
2022年5月1日発行■北島町立図書館・創世ホール
電話：088-698-1100　ファクシミリ：088-698-1180
〒771-0207　徳島県板野郡北島町新喜来字南古田91

創世ホールの休館について
■蔵書点検期間中の休館について

期間：6月13日(月)～6月23日(木)

■1階図書館の「蔵書点検」に伴い、創世ホールを休館いたします。
「蔵書点検」は所蔵資料を所定の位置に収め、不足がないかチェックする大切な作業です。
ご迷惑をおかけしまして恐れ入りますが、ご理解、ご協力くださいますようお願い申し上げます。

第26回 徳島9人のフルーティストによる音の贈り物

6月5日(日)

開場：午後1時30分
開演：午後2時
会場：創世ホール3階　多目的ホール
入場料：1,000円

※図書館カウンターで予約受付中
※音楽喫茶みき、黒崎楽器本店、フルートの店やまさんにて前売り券販売中

出演：[フルート]
中川優香、鈴江早都子、香川雅代、
安宅恵美子、澁谷華奈子、
森亜紀、久保由美、飯田緑

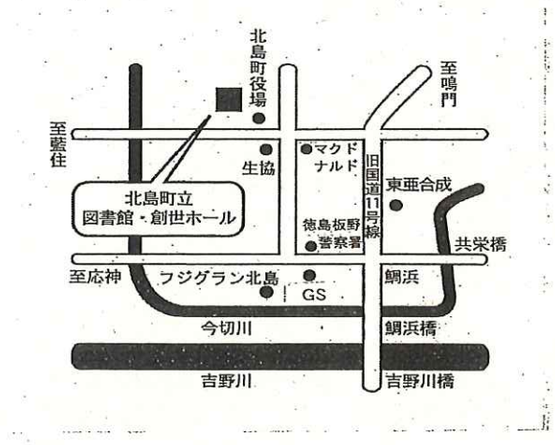
[ピアノ]
清穂花、平賀理絵、下竹とも子、三村加奈、
富士原萌、中井律、美馬かおり

演奏予定曲：
「フルート協奏曲第1楽章　C.シュターミッツ」
「ローエングリン幻想曲　G．ブリチャルディ」
「無伴奏ソナタ　イ短調　C.Ph.E.．バッハ」
「バラードOp．288　C．ライネッケ」
「ソナタ　第4楽章　C．フランク」
「カプリッチョ　E．クーラウ」
「牝山羊の踊り　A．オネゲル」
「ファンタジー　G．ユー」
「ソナチネ　H．デュティユー」
「タイスの瞑想曲　J．マスネ」
「春よ来い　松任谷由実」

問い合わせ：中川（☎090-5277-4650）
鈴江（☎090-6888-2198）
庄野（☎088-698-0890）
後援：北島町教育委員会

※創世ホールに来場される方へ※

▼入場される方には、マスクの着用と手指のアルコール消毒をお願いいたします。
▼観客同士の距離を一定の間に保つため、3階多目的ホールの座席数を減らしております。(前後左右を1席空けてお座りいただくようにしております)
■なお、今後の感染症拡大状況に応じて、対応を変更することがあります。ご迷惑をおかけしまして恐れ入りますが、ご協力くださいますようお願い申し上げます。



文◎化◎ジ◎ャ◎ー◎ナ◎ル

勇崎哲史さんの思い出●小西昌幸（創世ホール元館長）

■写真家の勇崎哲史さんと札幌市で初めてお会いしたのは2002年８月だった。20年前のことだ。交流が始まったのは、2001年頃か、きっかけは古い友人の木部与巴仁（きべ・よはに）さんのインターネット掲示板（ブログ？）だった。『伊福部昭・音楽家の誕生』（新潮社）の著者・木部さんの掲示板には伊福部昭さんのことが中心に書かれていて、愛好家が集っていた。勇崎さんは伊福部昭さんのご親戚だった（義理の甥。伊福部夫人の甥）。掲示板を通じて、札幌市の勇崎哲史さんと早来町の山田雄司さん、そして音更（おとふけ）町教育委員の南出さん、これらの方々と私は親しくなった。私は、伊福部昭さんに関する催しを北島町創世ホールで何とか開催できないか、ずっと思案していた。2002年、北海道東部の音更町の森に伊福部昭さんの音楽碑が建立されたので、それを観ることと、友人たちと会うことを目的に、８月下旬に北海道を初めて訪れたのだった。このときは、物凄くたくさんの大切な思い出があるが、克明に記すと、軽く四百字詰め30枚を超える分量になってしまうので、ここでは勇崎さんとのことに絞って書いて置く。当時の勇崎さんの肩書きは、ゼブラ・プラネッツ代表だった。同社は広告や催しの企画をする会社だったと思う。彼は写真甲子園の発案者だった。

■勇崎さんは、札幌に到着した私を迎えてすぐに、当時札幌大学学長をしていた山口昌男先生のところに連れて行って下さった。心地よい濃密な時間を過ごし、大学地下の山口文庫にもご案内いただいた。さっぽろ萌黄書店に移動するときには、山口先生が同乗された。そして、北海道ゆかりの博物施設や伊福部昭さんが住んでおられた場所などをご案内いただき、夜は、山口先生を囲む会に参加させていただいた。

■この北海道旅行で得た多くの啓示と練り上げたプランをもとに、2004年２月28、29日に北島町は《伊福部昭先生卒寿記念祭》を開催することになる。この記念祭は、２月28日に木部与巴仁氏講演会「伊福部昭・時代を超えた音楽」、29日に野坂惠子さん演奏会「伊福部昭の箏曲宇宙」という２日連続の、私の企画者人生をかけた渾身イヴェントである。この催しに勇崎さんは駆けつけてくださった。勇崎さんが徳島入りされた時の飛行機の機内には、野坂惠子さん、小宮瑞代さん、伊福部達（とおる）ご夫妻、八尋健生氏（不気味社）が同乗されていた。山田雄司さんは小西自宅で３泊した。勇崎さんと山田さんには、催しの駐車場整理係でお手伝いいただいた。勇崎さんはご自身が関わった北海道での伊福部昭先生のイヴェントの貴重なパンフレットを持参された。500円でロビーで販売した。催しの翌日は、私の車で各地をご案内し、長時間一緒に過ごした。彼はお餅が好きで、眉山ふもとの滝の焼き餅のお店にご案内し、喜ばれた。徳島市庄町にある古民家の画廊《ギャラリーのきは》に、勇崎さんと伊福部玲さんと八尋さんをお連れしたことも貴重な思い出だ。私が47歳、勇崎さんが54歳だった。

■2007年に勇崎さんは沖縄に移住された。途中、札幌の会社の解散や、大阪でお住まいだった時期もあり、ご苦労があったのではないかと思う。大阪でおられた頃に、一度、創世ホールを訊ねてくださったことがあった。

■沖縄で勇崎さんは光画文化研究所という写真の私塾兼事務所を開設された。再び深い交流が始まったのは2016年だった。夏に勇崎さんから相談を受けた。秋に沖縄の写真研究会のメンバーと一緒に徳島に撮影ツアーに行く計画があること、神戸空港からレンタカー数台で最初に北島町に来ること、その日の夜の食事会を北島町内で行ないたいのでどこかお店をあたっておいてくれませんか、という内容だった。一行は約20名。思案して役場の近くのイタリア料理のお店に決めた。なるべく安く、しかも満腹感のあるものをと考え、何度かお店の人と相談して特別に1600円ぐらいのコースをお願いした。勇崎さんのグループは「写真の歓び研究会」と言った。2016年11月18日夕方、ご一行は徳島入りした。当時、私は「徳島新聞」の夕刊コラムを担当していて、その中で勇崎さんが登場する回がいくつかあったので、そのコピーを研究会の人たちに差し上げた。イタリア料理のお店では、私のテーブルの前に、70代の朗らかな女性がいた。宮城ヨシ子さんという方で、名刺をいただいて仰天した。なんと、沖縄の著名な出版社ボーダーインクの創業者夫人（出版人！）だったのだ。たまたまボーダーインクの編集者の方と以前、東雅夫さん関連の怪談イヴェントで、ご一緒したことがあったので、宮城さんととても話が弾んだ。宮城さんは翌年、写真集『Frame Out（フレーム・アウト）』を刊行した。同書は、『週刊新潮』2017年11月30日号の書評欄で、大竹昭子さんに取り上げられ高く評価された。

■勇崎さんたちは、翌日、県西部に向かう（脇町のうだつの町並み～祖谷のかずら橋など）とのことだった。出迎えた日の夜、私は当時徳島新聞社会部デスクだった沢口佳昭記者に連絡した。沢口さんは即座に反応してくださり、県西部の支局が動いて、勇崎さんたちの撮影ツアーは、二日後記事になった。そして勇崎さんと沢口さんはこの時お会いになり、意気投合されたのだった。二人が交流できたことは本当に良かったと思う。

■その後私は、2018年１月に、沖縄の勇崎さんの門下生の方々と徳島で会うことになる。勇崎さんから、宮城さんが数名の女性と、徳島の文化の森の21世紀館イベントホールで開催されるローランド・リケッツ「藍のけしき」展（会期は20018年１月20日～28日）を観るためにそちらに行くからよろしく、と連絡をいただいたのだ。「藍のけしき」展は、一定の面積の布（20センチか30センチ四方のハンカチ様の布）を日本各地（世界各地？）の人が藍で染めて、その微妙に異なる色合いの布を天井から数百枚吊り下げて展示するという、巨大なアート作品だった。宮城さんたちは、その布をそれぞれ染めたことがあったわけだ。宮城さんたちとは、この時の夜の食事会でご一緒することができた。沖縄からほかに二人の方（新城清美さんと島袋博子さんの美人姉妹）がいて、私たちは楽しいひとときを過ごした。

■私は沖縄に呼び寄せられたのだと思う。ある時、南風原（はえばる）町観光協会の藤原政勝事務局長から、私たちは北島町で池田憲章さんが行なった講演会「脚本家・金城哲夫」のテープおこしが掲載された「文化ジャーナル」をコピーして勉強会に活用しています、と言われて仰天したことがあったのだ。藤原さんは徳島県のつるぎ町ご出身だった。そして勇崎さんや、宮城さんとのこともある。明らかに、沖縄から手招きされていたのだ。

■2018年初夏、沢口記者から沖縄訪問の誘いを受けた。９月下旬に、金城哲夫さんをテーマにした演劇（劇団民藝「光の国から僕らのために―金城哲夫伝―」）が沖縄で上演され、南風原町で金城哲夫展もあるので行きませんか。私は「ＯＫ」と即答した。９月23日から26日まで、３泊４日の日程だった。

■この沖縄訪問は本当に楽しかった。勇崎さんは、我々が滞在中の４日間の写真を撮影し、後に冊子（Ａ５サイズ48頁のミニ写真集）にして送ってくれた。だから今でも克明に日付が分かる。当該写真集には、勇崎さんが同行して下さった場所の記録が記されている。不屈館やジュンク堂でのボーダーインク・フェア（宮城さんが受付当番）や勇崎さんとお弟子さん（宮城さん、新城清美・島袋寛子姉妹）たちによる歓迎会、金城哲夫資料館などでの写真だ。

■勇崎さんは、沖縄各地の激戦区で深夜早朝にセミの幼虫の脱皮（羽化）の瞬間をとらえた写真を撮影し、その写真展を開催したいと構想を話してくれた。それは地獄のような沖縄戦の最中にもセミの幼虫は地下から出てきて脱皮してセミになっていただろう、そして人間界の愚行を見つめながら短い生涯を終えていったであろうという、強い無常観や戦争への批判意識を込めたものだった。

■勇崎さんが暮らす光画文化研究所には、猫が二匹いた。勇崎さんは、猫の里親探しの会に出かけて、悩んだ末に飼うことにしたと話した。

■2019年は、12月１日～３日まで沖縄訪問した。このときは、神戸大学名誉教授の横山良先生（アメリカ史、徳島市在住）も一緒で、３人による旅だった。糸満市の県営平和祈念公園や、名護市の国立療養所沖縄愛楽園（ハンセン病の施設。徳島出身の青木恵哉〔あおきけいさい〕が創設に深く関わる）などに行った。２日目の夜に勇崎さん、宮城さん、新城さんと再会し、楽しいひとときを過ごした。

■2020年は、つらい年だった。新型コロナウイルス感染症で、世界は大混乱になった。そして私には勇崎哲史さんの肺ガン発症が、大きなショックだった。ご本人から友人知人にあてて、折に触れて、病状報告がなされた。コロナ禍や台風のことがあり、沖縄訪問は困難だったが、前年訪問した愛楽園のギャラリーで勇崎さんの「蝉、生まれいずるころ。」が開催されることを知り、沢口さんと相談して、12月３～５日に沖縄に行くことにした。時期が時期だけに、極力、人と会わないようにした。この時期、勇崎さんは、がん治療中（入院中）だったので、お会いできないことは分かっていた。私たちはせめて氏の展覧会場に足を運びたかったのだ。私と沢口さんは、受付でカンパを包んでお渡しした（学芸員の方にことづけた）。

■そして2021年４月。勇崎さんの闘病について、お弟子さんの写真家・石川竜一さんから重たい知らせが届けられた。ガンが脳に転移し意識朦朧としたことが最近あったこと、応援する人たちで身の回りのお世話をしていること、既にみな覚悟していることなどが切々とつづられていた。

■2021年７月１日、勇崎哲史さんは天国に旅立った。71歳だった。下（最下段）に、「琉球新報」の訃報記事をつつしんで転載させていただく。

■2022年５月10日から15日まで勇崎哲史追悼写真展「光の記憶」が沖縄県立博物館・美術館県民ギャラリーで開催される。私と沢口さんはそれを観に行く。14日は宮城さんが在廊なので、その日に行くことに決めた。

■勇崎さんは、ローリング・ココナッツ・レビューという催しの映像記録班として関わったご経歴があった。その時の縁で、イラストレーターの八木康夫さんと親しかったらしい。八木さんルートでフランク・ザッパの音楽を愛好されていたことも。さらには、お父上が奇術師だったこと、謄写版印刷の技術が卓越した方だったということも。それらはご闘病中にいただいた電子書簡で知った。もっと話したいこと、教えて欲しいことがあった。それは、もはやかなわない。私は勇崎哲史さんのことを思い出すたび、ため息ばかりついている。★20220513脱稿

◎　◎　◎　◎　◎　◎　◎　◎　◎　◎　◎　◎　◎

「琉球新報」2021年７月２日付け配信記事■写真家の勇崎哲史さん死去 71歳／写真集「大神島・記憶の家族」など発刊／沖縄の日本復帰前後から県内各地を撮影し、大神島（宮古島市）の家族をテーマにした写真集などを発刊した写真家の勇崎哲史（ゆうざき・てつし）さんが１日午前10時57分、肺がんのため宜野湾市の病院で死去した。71歳。北海道札幌市出身。自宅は那覇市。告別式は行わない。／東京綜合写真専門学校在学中から卒業後にかけての1971～73年、宮古島を中心に沖縄のほぼ全域を訪れた。84年、北海道東川町に「写真の町構想」を提案し94年から「写真甲子園」を考案し実施した。2007年、那覇市に移住し光画文化研究所を開設し、プロ写真家から学生まで幅広い受講生を指導した。主な著作に写真集「大神島・記憶の家族」「思考方法としての写真」などがある。／勇崎さんに師事してきた写真家の石川竜一さん（36）は「大きな支えが無くなった寂しさがある」と声を落とす。「基本や歴史的なことも教えてもらった。常に地位や名誉、権力を避け、子どものような純粋な気持ちで写真が好きな人に公平に向き合った」と存在の大きさを語った。／勇崎さんは長年、写真家の故・平敷兼七さんと親交を深めた。浦添市城間で平敷兼七ギャラリーを営み、平敷さんと勇崎さんの二人展も開催した平敷さんの次女・七海さん（46）は「（受講生の）それぞれが持つ力を引き出すのがうまい。写真を愛していた人だった」と別れを惜しんだ。